「あの日気付いた事感じた事」

石巻市立蛇田中学校
一年　森田　めぐみ

今年三月、門脇小学校が閉校しました。私はこの門脇小学校に入学し、楽しい日々を送りながら多くを学び、あたり前に過ごしていました。しかし、あの震災が全てを変えてしまったのです。

二〇一一年三月十一日、私は当時小学二年生でした。突然の大きな揺れに、今まで経験したことのない恐怖を感じていたのをはっきりと覚えています。そしてすぐ近くの山へ避難しました。そこから見た光景は本当に恐ろしいものでした。大津波が家や学校、町中を容赦なくおそいました。尊い命までもうばってしまいました。私は怖くて言葉も出ず、ただ震えながら兄と避難所で母を待ちました。

待っても待っても、母は来なくて、心配で胸が張りさけそうでした。停電で辺りはどんどん暗くなっていく中、母が足をヘトヘトにしながら来てくれました。母の顔を見た時はすごくホッとしました。

「お母さんも無事で良かった。」

と心から思いました。

でも、安心したのもつかの間、今度は避難所に火災が迫り、私達は別の避難所へ移動することになりました。外に出ると、大勢の人達が真っ暗闇の中を失望した顔で歩いていました。私達も暗闇の中をただ歩きました。その時です。ふと空を見上げると、そこには今まで見たこともないくらいの無数の星がまたたいていました。手を伸ばしたら届きそうなくらい近くで、光り輝くたくさんの星がありました。

「こんなにキレイな星がこの町にあったんだ。」と初めて気が付きました。なんだか闇の中で途方にくれる私達を空から明るく照らしてくれているように感じました。

その後、私達は避難所で数日間過ごしました。夜が明けると給水所に水をくみに行ったり、支援物資でもらった食べ物を分け合って食べたりしました。夜は寒さをしのぐために、皆でくっついて寝るようにしました。それでも凍えるような寒さで何回も目が覚めました。

「家に帰りたいなぁ。お腹が空いたなぁ。布団で寝たいなぁ。」

と何度も思いました。その後、私達家族は、石巻を離れ神戸市に行くことになりました。

一年間の神戸での生活は不慣れなことばかりで、失敗することもよくありました。アパートで一人で留守番することも多く、とても心細く感じていました。時々、テレビで被災地石巻の映像が放送される時は、とてもなつかしく思いました。古里を離れて初めて古里の良さを感じとりました。それでも神戸では、周りのたくさんの人達に温かく支えていただき、楽しい思い出もあふれるほど作ることができました。観光地に行ったり、地元の食べ物も味わいました。もちろん、友達もいっぱいできました。そして、神戸での思い出を胸に古里石巻へ帰ってくることができました。

ところが、石巻に帰ってみると、以前のような生活とは全く違い、友達や地域の人達も新しく変わり、何もかも始めからのやり直しでした。私はそんな今までとは違う環境になかなかとけこめず不安でいっぱいでした。でも石巻では、少しずつ復興へ向けて多くの人達が一生懸命に力を合わせている様子があちらこちらで見られました。そんな様子を見ているうちに、

「私も精一杯、もう一度がんばってみよう。」

という思いがこみあげてきました。

震災は、とても恐ろしく二度と起こってほしくはありません。でも、震災があって何もかも失ったからこそ、今まで気付かなかったとても大切なことを知ることができたのだと思います。あの日、夜空に無数に輝いていた星は、私達に何かを伝えようとしていたのではないでしょうか。命の尊さ、古里の愛しさ、そして何よりもあたり前のように暮らしていた全てのことが、とても幸せだったんだということを教えてくれたのだと思います。

私は現在中学一年生になりました。そしてまたあたり前の生活を送っています。朝起きてご飯を食べて、学校へ通い、友達と勉強したり、部活で汗を流したりしています。家に帰ると、家族でテレビを見ながらなにげない時間を過ごしています。これは本当に普通のことです。でも何よりもこれが一番大切なことだということを決して忘れてはいけないと思います。

人の記憶は時間と共に薄れていくものだとよく言われます。でも、私はあの日気付いたことや感じたことをいつまでも心の片隅に置きながら、あたり前の幸せに感謝の気持ちを持って生きていきたいです。

五年の時を重ねて

石巻市立石巻中学校
三年　齋藤　瑞樹

東日本大震災から、五年が経とうとしている。この五年で、私達の住む石巻はずいぶんと変わった。あの頃と同じように、当たり前のように生活している。美味しい物をたくさん食べ、他愛のない話をし、毎日を普通に過ごしている。私は、それを見るたび、少し怖いと思った。また、同じような地震が来たら、どうなるのか。きっと、もう一度大切な人を失ってしまうだろう。私達は、あの東日本大震災から学んだ、大切なものを忘れかけている気がする。

今年の夏休みに、私は母と一緒に南三陸町防災対策庁舎へ行った。周りは、積まれた石や砂の山。重機の音が響いていた。防災対策庁舎の前には、たくさんの花と線香が置いてあり、赤く錆びた柱が目立っていた。母は、私にこう言った。「当たり前が、当たり前じゃなくなるのって、こういう事なんだね。」私もそう思った。すごく悲しくて、重い言葉だった。

この日以来、私は避難生活を送っていた頃を、振り返るようになった。食べた事がない、避難用の食品や配給品。電気が通っていない、暗くて寒い部屋。思い出したくない事ばかりだった。でも、少しずつ部屋の人と親しくなり、友達ができ、スーパーに何時間も並んで、ジュースやお菓子を買った事。久しぶりに外へ出て鬼ごっこをした事。一番嬉しかったのは、蛇田にあるイオンが再び開店した事だ。初日に行って、一日遊んでいたのを思い出す。避難生活をしていた私達にとって、こんなささいな事が嬉しくて、幸せだった。あの暗くて寒い部屋で食べた、配給品の缶詰が本当に美味しかったのだ。それが、今ではどうだろう。私は、何も言えなくなった。

なにもかもが無くなった五年前から、石巻もずいぶんと変わり、活気が戻ってきた。それを、私達は復興という。生活も、今まで通り送れるし、買い物にだって、遊びにだって簡単に行けるようになった。それは、一人一人が石巻を思い、助け合ってきたからこそ、できるようになったのだ。それに、私の生活も変わった。食事は残さず食べる。家族との会話を大切にする。ごく普通で当たり前の事だが、私はそれを毎日心がけている。一日一日を、大切に過ごしている。それは、震災で学んだ。当たり前が当たり前じゃなくなる事に恐怖を覚えたからだ。十分に食事ができなかった生活を送った事があるからだ。大事な人を失う悲しみを知ったからだ。

東日本大震災、それは、今を生きる私達に必要な事、そして、日々の大切さを教えてくれた。あれから五年。あの時学んだ事を、今の生活で生かす事ができているか。きっと、今も心に大きな傷を負っている人がたくさんいると思う。その傷と共に、震災を経験した苦しみや悲しみと共に、当たり前という、普段の生活に感謝し、今を、そしてこれからを生きていく事が、私達の復興という未来につながるだろう。五年という時を重ね、本当の幸せの意味を知った。それが私達の強い、第一歩になることを信じて。

震災から五年

石巻市立牡鹿中学校
三年　佐藤　楓

三月十一日、東日本大震災が起きたあの日から、五年経過しようとしている。

私の住む牡鹿半島は、震災で大きな被害を受けた。めくれた道路、壊れた船、ヘドロでよごれた家、流れついたがれき、私は自分の家へ帰ろうとした時、絶望した。自分の目に映った光景は本当なのだろうかと。しかし、私の目には涙はなかった。きっとそれは、私を支えてくれた人がいたからだと思う。家族、友達、先生、ボランティアの皆さん、たくさんの人がそばにいてくれた、励ましてくれた。そして、私の心を温めてくれた。

私はたくさんの人と出会い、ふれあう中で人の優しさ、温かさを感じることができた。

震災から二年が経ち、私は中学校に入学した。私が通う牡鹿中学校では震災後、「笑顔創造プロジェクト」という活動を行っている。これは、震災で活気を無くした町に、そして地域の方々に、中学生が笑顔を届けたいという思いで行っている活動である。これまで、牡鹿中伝統の侍ソーランを地域の方々に披露したり、仮設住宅のごみ拾い、海水浴場の清掃、また、スマイルカレンダーという、たくさんの人の笑顔の写真が詰まったカレンダーを作成したりしてきました。私は様々な活動をしていく中で、たくさんの事を学び、感じてきた。そして、震災の時に感じたあの温かさをまた、思い出すことができた。そこから私は、人とふれあうことで感じる人の優しさ、温かさは忘れることのない、とても大切なものだと気付かされた。

震災から五年が経った今、私は中学三年生になり、中学校生活もあとわずかとなった。中学校を卒業すれば、私がたくさんのことを学んだ、「笑顔創造プロジェクト」の活動もできなくなる。しかし、私はそこから学んだことを生かし、高校でも誰かを笑顔にし、心を温めることができる、そんな活動を続けたいと思っている。五年経った今、私は自分でもできることを探し、誰か一人でも笑顔にさせること。それが、未来を生きる私たちの役目でもあるのではないかと思う。

五年前のあの日から　五年後の今日

石巻市立門脇中学校
三年　池田　有梨花

月日の経つのは早いもので、あの東日本大震災からもう、四年と八か月が過ぎようとしています。

五年前の三月十一日、多くの人々の命や住んでいた家が一瞬のうちに津波によって奪われました。今でも、あの揺れの大きさ、津波の来る音、生臭いヘドロの臭いを忘れることはありません。

地震の揺れが来たとき、とにかく頭の中には「怖い」という感情しかありませんでした。そして、揺れがおさまった後、私は母と姉と一緒に自分の家へ戻ってしまったのです。まさか、あんな大きな津波が襲ってくるなんて誰も思ってもいなかったからです。

家に着いてすぐ、海の方から「ゴー」という地に響くような音が聞こえてきました。私は後ろを振り向かず、一心不乱に学校に戻りました。だから私は実際に津波が来ているのを見ていません。そして、「明日には家に帰れる。」と思っていました。

そんな私の思い込みとは裏腹に、私は大好きだった家を津波で失い、二度と家に帰ることはできなくなってしまったのです。

私が今住んでいるのは仮設住宅です。ここに住むまでに一年ほど時間がかかりました。それまで、私たち家族は色々なところで仮設住宅に住める時を待っていました。もちろん、たくさんの人々にお世話になりながら。

私が一番辛かったのは、いつ終わるのか分からない避難所での長い生活です。そこには私と同じくらいの年の男の子やたくさんのお年寄りの方々がいました。そのお爺ちゃんやお婆ちゃんと一緒にテレビを見たり、お菓子をもらったりしたのを覚えています。夜九時の消灯時間や、見たいテレビ番組が見ることができなかったことは全然辛くありませんでした。辛かったのは、夏の暑さ、冬の寒さです。

夏の日差しが照りつける夏に学校から帰ってきても飲み物はぬるかったり、お風呂がないので毎日銭湯に通ったりしました。それでも寝ていると暑くて汗をかいてしまいます。冬には手足が凍りそうなほど冷え込みました。私だけでなく、周りのお爺ちゃん、お婆ちゃんたちにとっても辛いことだったと思います。だから、仮設住宅が当選したことを知った時は救われる思いでした。

仮設住宅は、やはり、住むには十分な広さではありませんし、隣の人の声が聞こえてくることも度々あります。何より学校まで遠いことがとても不便でした。今ではスクールバスで通学していますが、最初からあったわけではありません。朝は母に送ってもらい、帰りは母の職場まで歩くという毎日でした。しかし、避難所での生活や、私以上に辛い思いをした人はたくさんいることを思うとこんなこと全然辛くないと思えてくるのです。むしろ、震災がなかったら知り合うことができない人たちともたくさん出会うことができました。

だからといって、地震と津波の恐ろしさを忘れていいという訳ではありません。今でも時々地震が起きることがあります。被災した人の中にも、今では、珍しいことではない、とほとんどの人が思っているかもしれません。もしかしたら、東日本大震災と比べたら全然大したことではない、と感じる人もいるでしょう。

しかし、私たちは、あの震災を体験したからこそ、地震だけでなく、いろいろな災害への防災意識を高めなければならないのです。そして、災害が起こることの恐ろしさや悲しみ、怒りを後世に伝えていくことが大切なのです。もしも後世に伝えるべきことを私たちが伝えなければ、震災を経験して得たことがすべて無駄になってしまいます。私たちの防災意識を高め、それを後世に伝えることができれば、それはきっとかけがえのない貴重な財産になるはずです。

私の住む石巻だけでなく、被災した地域が完全に復興するにはきっとまだ時間がかかることでしょう。そして、復興には時間だけでなく、私たちが復興の力になろうとする気持ちも必要です。復興するのを待つだけでなく、私たちの心身の回復と地域での交流を進んで行うことが私たちに求められることの一つだと思います。

私は、震災から悲しみだけを見出して失望するのではなく、これからの未来に希望を抱いて前に進んでいきたいと思います。

「スポーツの力」

石巻市立山下中学校
三年　韮沢　陽斗

震災から五年目を迎えました。五年前、私は小学四年生でした。大きな被害を受けた私の町は、あの日から復興を目指してきました。現在、あの日より復興はしましたが、まだ昔の姿を取り戻してはいません。

私が、あの震災から立ち直れたのは、スポーツのおかげでした。被災地ということでたくさんの支援を受けました。その支援の中にスポーツの試合観戦などもありました。そこで私は、とても勇気をもらうことができたのです。その日から「スポーツの真の力、スポーツでどれだけの人が救われるか。」そんなことを考え始めました。

そして、中学校に入学。私は、好きだったサッカー部に入部し、どうしたらサッカーで人を助けることができるのかと考えました。そして、目標を立てました。その目標は、チームの代表になる、というものです。代表となり、チームを盛りあげ、サッカーをする人、見る人多くの人を楽しませたいと思いました。そして、その目標を実現するために必要なことを考えました。それは、今、誰よりも努力するということでした。今、人一倍努力することで、その目標を実行することができると思ったからです。そして、私は、チームの代表になり、また、キャプテンをまかされるようになりました。それに一番喜んでくれたのは、母でした。この時私は、その姿を見て母にも私が感じたスポーツの力が伝わったのかなと思いました。

私は、それが自信となり、どうしたらもっとたくさんの人を助けられるのかなと考えました。それは、優勝するしかないと思いました。そのために、今度はチームで、努力しなければならないと思いました。自分達が優勝することでもっとたくさんの人に、スポーツの力が伝われば、たくさんの人の勇気や希望になるのではないかと思うので、自分のためにということもありますが、誰かを助けるために、自分の道をしっかりと進もうと思います。

また、震災のことを忘れてはいけないと私は思っています。なぜなら、震災でとても悲しい思いをした人がいるからです。確かにあの日、大切な人や家族、友達を失った人がいると思います。ですが、悪い方向にばかり考えるのは、よくありません。それは、震災があったから、防災面を意識するようになった。震災があったことで、新たな出会いが生まれた。そんなことを考えると、震災というものは、確かに失ったものが多いです。ですが、自分達が得たもの、というものも多くなるのではないかと思います。

私は、今を生きている人々は、生き延びたのではなく、生かされたのだと思っています。そのように考えることで、今、この地に立てることがどれだけ幸せなことなのかが分かってくると思います。

そして、今を生きる、一人一人に、何らかの存在意義がありそれを互いに尊重しあわなければならないと思います。そのため、これから出会う人、学校生活を共に過ごす仲間を大切にしていかなければならないと思います。

震災から五年を迎えました。あの日から立ち直れない人がまだいると思います。そんな人達のために、自分が、何をするべきなのかを深く考え、自分ができる精一杯のことをこれからしていきたいと思います。

そして、町の復興に協力し、昔の町の姿を取り戻せるようになることを願いながら、この先の長い人生に、油断せず、今できることを考えながら、今、という時代を歩み続けたいです。

東日本大震災を経験して

石巻市立大須中学校
二年　小松　あゆみ

東日本大震災から五年目になります。先日の大雨による各地の水害を見たときは震災時の記憶がよみがえり、胸が痛みました。

私には、あの東日本大震災を忘れることができない理由があります。それは震災で父を亡くしたことです。とても悲しい出来事でしたが、この震災では強く生きることの大切さなどを知ることができました。父だけではなく、震災ではたくさんの人の大切な命が奪われました。震災のことを考えると、とても辛く悲しかった気持ちを思いだします。でも、このような経験から、しっかり避難したり、高いところへ逃げたりして、まず命を守ることが大切であると強く思いました。震災のような大きな地震はいつくるか分かりません。私たちは、防災の重要性を考えなければいけません。避難訓練をはじめとしたいろいろな訓練でも、落ちついて行動できたらいいと思います。

東日本大震災から五年がたとうとしている今、私たちは平穏な日常生活を送ることができています。震災の時の辛く悲しかった気持ちは今でも記憶に残っていますが、平穏な日常生活を送れていることには、本当に感謝しています。震災時に助け合った仲間たちがいたから今があるのだと思います。

震災から私は、辛くても仲間と助け合うことの大切さや生きていく上で必要な知恵を学びました。震災で父を亡くしたことはとても悲しく辛いことでしたが、そこで弱気にならず、強く生きることの大切さを知り、強い気持ちでこれまで頑張ってきました。助けてくれた仲間、色々なことで協力してくれた先生方には本当に感謝しています。ときどき震災時を思いだすこともありますが、仲間たちの笑顔を見ると私も自然と笑顔になり、「みんなと頑張ってきて良かった。」と思います。

これからも、みんなで協力して頑張っていきたいし、感謝の気持ちを忘れずに生きていきたいと思います。

命の絆を未来に生かして

登米市立東和中学校
三年　秋葉　穂乃実

私の第二のふるさとは、石巻にある母の実家です。小さい頃から何度も泊まりに行き、思いっきり遊んだ思い出の地です。祖父母の温もりに包まれて安心し、いつも元気をもらえた母の実家は、五年前の東日本大震災の津波で多くの被害を受けました。

あの日は、石巻で働いていた父もやっとの思いで津波から逃げれたものの帰宅まで数日かかりました。まだ小学生だった私は、一旦は校庭に避難し、家に帰っていかに大変なことが起こったかを知りました。これまでに経験したことのない天災。私の家は大丈夫でしたが、ライフラインが滞り、電気・水道が使えなくなり、暗い闇の町が静か過ぎて不安になる一方でした。「石巻はどうなっているのだろう？」津波だけでなく火災も発生し、父や祖父母の安否が心配で眠れませんでした。

母の実家は、皆無事でしたが、家の中は泥や瓦礫でごちゃごちゃになっていました。私はすぐには行けなくて、写真で見せてもらい、その光景に言葉を失いました。瓦礫は「役に立たないもの。その集まり。」という意味ですが、全ては意味があり、住人の皆さんにとって大切でかけがえのないものばかりだったはずです。被災地になる前の石巻の実家の中は全部覚えていたのに、あまりに何も無くなってしまい、頭の中が真っ白になりました。

五年経過した今でも、実際に被災地を訪れた時のショックは消えません。地元の新聞に毎日記されている東日本大震災の被害者数。今年の十一月末、宮城だけでも九五四一人の死者数、一二三七人の行方不明者数。各県警などによる全国の死者数一五八九三人、行方不明者数二五六七人という調査結果を見る度心が痛くなります。たくさんの命が一瞬のうちに奪われ、悲惨な現実を受け止め、それでも復旧や復興に向けて一歩を踏み出さなければならなかった人々の気持ちは、どれほど複雑だったことでしょう。まだまだ助けを呼んでいる人、行方不明者の家族など愛する人を見つけてほしいと願っている人が多くいるのです。「一つの骨、小さな骨だけでも見つけてほしい」と、心の底から叫んで探し求めているという話も聞いたことがあります。今でも一生懸命に木々や瓦礫を分けて分けて、この世に生まれ、生きていた証を探している人もいるというのです。

亡くなった方々や行方不明になってしまっている皆さんの事を考えれば、私の家族や祖父母、親類は命があるので幸せなのかも知れません。しかし、それでも復興への努力を継続して積み上げ、震災前の日常生活を取り戻すのは容易ではありません。

現在、石巻の祖父母は、仮設住宅に住んでいます。私は祖母に、

「狭くないの？」

と聞きました。すると祖母は、

「住める家があるだけで十分だよ。」

と言いました。抽選で当たればと多くの人々が押し寄せ、なかなか実現しません。私は、「ただいま！」と言って帰る自分の家があり、迎えてくれる家族がいて一緒に騒ぎ、笑い、おいしい食事をとれることが、どれだけ大切で必要なことで、尊い幸せであったかを改めて考えてみました。

東日本大震災後の復興が進む中で、石巻の家は危険区域に入り、残った部分を撤去することになりました。祖父母は話し合い、崩す決意をしたそうです。母の実家の茶の間は、私にとって心が落ち着き、楽しい団欒の場でした。二階の窓から屋根に上り、石巻の花火大会を姉妹や叔母と「きれいだね」と言って見た感動が鮮明に思い出されました。祖父は家の全てが無くなるまで見続けたそうです。このことを平気で笑いながら話してくれた祖母も心中では、泣いていたかも知れません。

祖父母は、私たち孫に明るく元気な姿を見せてくれます。「まだ大変な人たちがいる。前に向かって力強く生きなければならない。助け合い、励まし合って、できることを行い命を大切にしないとね。」と教えてくれます。

私の十五歳の誕生日。十月十日には、石巻へ行きました。「プレゼントを買いに行けなかったから。」と手渡された封筒には、お金が入っていました。祖父母の生活が大変なことがわかっていたので申し訳なく思いました。その封筒に、祖母の字で「かぜをひかないでがんばってね。」と記されているのを見た時、優しさが心にしみ、感謝で涙があふれました。私も祖父母の希望の存在になると決めました。

震災から五年目を迎え、二度と戻らぬものがあることを実感しました。だからこそ命や人と人の絆を大切に、新たに築き創りあげていかなければなりません。そして、想定外の出来事にも柔軟に対応していくために、日頃から防災を心掛け、「ここは大丈夫」等と軽く楽観せず、危険予知や万が一に備えての対策も考え、より良い方法を学び合って実践していきたいです。私も協力する確かさで、くじけず、人の役に立てるように頑張ります。

前を向いて

登米市立米山中学校
三年　及川　琳己

「行ってきまーす。」
小学校四年生の私は、いつもと同じように登校の支度をし、家を出ました。生まれ育った自宅に、もう二度と帰ることができないとも知らずに。
　私は、東日本大震災を、南三陸町の志津川で経験しました。この日の最後の授業は、サッカー。夢中でボールを追いかけ、試合を楽しんでいました。そのとき、
「みんな！早く集まれ！」
という先生の緊迫した叫び声と同時に、激しい揺れが私たちを襲いました。左右なのか上下なのか分からないほど大きく揺れ動く地面は、まるで生き物の背に乗っているようでした。私たちは、数分間その地面にうずくまり、必死に身を守りました。やがて校舎にいた生徒や近隣に住む町の人たちが次々に小学校の校庭に集まって来ました。雷が鳴り、雪がちらつく冷たい空気に揺れ続ける地面。みんな激しく動揺し、混乱していました。そして追いうちをかけるように、あの黒い大きな壁がやってきたのです。低く気味の悪い地鳴りのような音。その方角に目を向けると、巨大な津波が人も家も車も押し流し、バキバキと音を立てながら町全体を飲み込んでいくのが見えました。一緒に見ていた人たちの悲鳴や叫び声が聞こえ、私もショックと恐怖で涙が止まりませんでした。日が暮れて寒さは一層増しました。私は、二つ年下の妹と小学校で一夜を明かしました。暖を取るものがなかったので、一つの教室に七十人余りが身を寄せ合い、新聞紙にくるまって寝ました。
「ここ、どこ？うそでしょ。」翌日見た光景を、私は決して忘れることはないでしょう。昨日まであった日常は全て消え、ありとあらゆる命が奪われていたのです。私は、あまりの衝撃に言葉を失いました。そして、再び大きな恐怖に襲われました。「家族は生きているのだろうか。まさか、あのガレキの中に…。お願い、無事でいて！」居ても立っても居られず、大きな不安で押しつぶされそうになりながら、妹の手を引いて自宅に向かいました。ガレキの中を四時間歩きました。自宅も何もありませんでした。もちろん、家族も不明。急に足が重たくなり、空っぽな頭と心は、言いようのない悲しみでいっぱいになりました。気力も体力も既に限界でしたが、私は頑張るほかありませんでした。妹がいたからです。とにかく妹を守らなければと思い、自宅のあった場所を離れて親戚の家へ向かいました。目に映る光景が不安と恐怖をあおり、何度も心が折れそうになりました。その度に、「大丈夫…。大丈夫…。」と自分に言い聞かせ、妹と励まし合いながら歩き続けました。そして、奇跡が起きました。母に会うことができたのです。母の姿を見た瞬間は、言葉になりませんでした。体中の力が抜けて、ただただ安心したことを覚えています。他の家族とは数日間連絡が取れなかったものの、幸い全員無事でした。その後は登米市に移り住みました。現在、家族は仮設住宅と新しい家とに分かれて暮らしています。
　あれから五年。今でこそ、震災前とあまり変わらない生活を送っていますが、転居したての頃は、苦しくて辛いことばかりでした。
「震災で死んだ奴らが悪いんだべや。」
転校先の同級生が放った言葉に私は深く傷つき、人間不信に陥ってしまいました。そして心を閉ざしたまま、皆と距離をおきながら小学校を卒業しました。中学校に入ってからもそれは変わらず、周りの視線を気にして、孤独に悩む生活が続きました。また、震災に関係した講話や防災訓練の際には、気分が悪くなり、自分でもコントロールできないくらい不安定な状態になることもありました。しかし、そんな私を救ってくれたのは、転校先の小学校で出会った友達でした。彼女は常に私の傍に寄り添い、気にかけて励ましてくれました。ある時は優しく声を掛けてくれ、またある時は黙って抱きしめてくれました。彼女の存在は、本当に大きく、その優しさに触れる度、私は以前の自分を取り戻していきました。今思うと、他にもそうしてくれた友達はいたかもしれません。学校では先生方が、家では家族が温かく支えてくれました。そして、私は気付きました。今までたくさんの人の優しさに生かされてきたことに。
　この五年間を通して、私は心の痛みや苦しみと向き合うことの大切さを知りました。良いことばかりではなったけれど、震災をきっかけに、自分が人のためにできることを考えるようになりました。そして、支えられる側から支える側の人間になりたいと強く思うようになりました。これからは、悩んでいる人や助けを必要としている人に、自分から手を差し伸べて、困難を克服する手助けをしていきたいと思います。また、家族を今まで以上に大切にし、あの日あったことを未来に伝えながら、強く前を向いて生きていきます。

「五年が経った今、出来ること」

登米市立豊里中学校
二年　阿部　悠生

震災から五年が経った今、日常の中で震災のことを考えることが少なくなりました。しかし、あの日の事は、今でもはっきりと思い出せます。

その当時、私は小学校三年生で、教室で帰りの会をしていました。すると、急に景色が揺れ始め、先生の声と共に机の下に隠れました。そこで目に映ったものは、教室のテレビや教卓がすごい勢いで動いている様子でした。揺れがおさまって校庭に避難すると、友達が、

「家にあるゲーム機がこわれてないかな。」

と言い出し、そのことをきっかけにゲームの話で校庭が騒がしくなりました。すると、先生が私たちに「こんなときくらい静かにできないのか。」と怒鳴り、その緊迫した表情が、今起きている事の重大さと、日常が壊れた事を物語っていました。それからは少し静かになり、体育館に移動して、家族が迎えに来るのを待つことになりました。

友達が帰り際に、

「これが、宮城県沖地震のはずだ。気を付けろよ。」

と話していました。地震がそれほど大きなものだと初めて知り、とても怖かったです。家に帰ってからお父さんの携帯電話を使って見た光景は、とても衝撃的でした。街に津波が押し寄せて家をなぎ倒し、飲み込んでいく姿に怖さでいっぱいになりました。

それから一年が経ったころ、私は祖母が働いていたボランティアグループの事務所によく行くようになりました。そのボランティアグループは、東日本大震災の復興のための活動をしている団体です。私は、そこに交じって話を聞かせてもらったり、手伝いをしたりするようになりました。普段の仕事は、ガレキの撤去や、被災した子供たちのための遊び場作り、地域の人たちを励ましたり、手伝ったりするための寄付金集めなどです。震災直後は、被災地に水や食料品を届けたり寄付金を募ったりもしました。災害時は、電気も水もないので調理しなくても食べられる食料や水がとても重要でした。私はその中の、子供のための遊び場作りに参加させてもらいました。

活動場所に着くと、大体遊び場は出来上がっていて、子供たちが遊んでいる状態です。タイヤなどを利用して遊び場を作っていて、そこで遊んでいる子供たちは被災したとは思えないほどに、ずっと笑顔で、とても楽しそうだったのを良く覚えています。

そのボランティアグループの事務所には、たくさんの写真が貼ってあります。それは、どれも活動の時の写真で、やはり、どの人も皆、笑顔でした。そのボランティアグループの活動目標である、「寄りそう」ことが被災者の方々に安心と笑顔を与えるのだと感じました。

しかし、いまだ復興は完了していないのが現実です。まだ手つかずになっているところもたくさんあります。どうしたら復興が進むのか。それは、宮城県、東北、日本が協力し合い、一丸となって復興に取り組むことだと思います。協力して、被災者に寄りそうことは、大きな力になるはずです。震災から五年目を迎えた今、誰かのためにした事が他の誰かにもつながっていき、大きな力を生むのだと、強く考えるようになりました。それをより生かすためには、普段から災害について考え、関心を持つことだと思います。自然が起こす、おそろしいこの災害を忘れず、普段から防災に努めることが、いざというときに力になると思います。そして、完全な復興を目指して全力で取り組むべきだと思います。

ボランティアの皆さんが言っていた「寄りそう」という心を持って、被災地のためにできること、それをすれば、復興、そして、防災にもつながっていくはずです。

また、いつ東日本大震災のような震災が起こるか分かりません。だからこそ、今、何事もなく過ごせている事に感謝して、生活すべきだと思います。私は震災時に、停電のために電気がなく、水や食料にも困った事を忘れないために、日頃から、節電、節水を心掛け、毎日の生活を改める努力をしています。

そして私は、あのボランティアグループの方々との出会いをきっかけに、これから、ボランティア活動を再開してみたいと思っています。どこかで、また災害が起きたときには、私も一緒に、ボランティア活動に取り組みたいのです。被災地のことを他人事だと思わずに自分から活動していくことこそが大事だと思うからです。

これからも、震災を忘れず、その経験を教訓にして、人のために役立つ人間へと成長していきたいです。

夢を築く

気仙沼市立唐桑中学校
一年　吉田　巧樹

僕は、祖父と父の下について仕事の修業をする。必ず二人を越える建物を作る!!

僕には、小さな頃から変わらない夢があります。それは建築家になることです。僕を育ててくれた周りの方々に恩返しをしたいからです。僕が設計して、大工になり、この地区、この町、そして、世界に僕が作った建物を残す。僕の足跡を残すこと、未来に向かい平和に暮らす町を築くことが、中学生になった今の僕の大きな夢です。僕は幼い頃から、職人に囲まれて育てられました。職人の話は、とても勉強になり、楽しいです。でも楽しいことばかりではありません。

生涯忘れることが出来ない東日本大震災、僕の地域は津波で壊滅しました。当時小学二年生だった僕は、避難生活の間大好きな家に帰りたくてたまりませんでした。数日後、やっと家につれていってもらいました。平和に暮らしていた家は、津波で流され、斜めになり崩れていました。どんなに忘れようとしても、忘れられない景色です。今、思い出すだけで心の中は、黒色か灰色に変化してしまいます。今、住んでいる家からの景色は茶色です。盛土工事をしているからです。「早く、大人の人達、なんとかしてよ」と心の中は苦しくなります。しかし、毎朝、スクールバスのバス停まで歩いていく途中の広場には、朝早くから大勢の職人さんが集まっています。八十人くらいの職人さんがいます。地区のため、みんなのため、未来のため、再び津波が来ても安全に暮らせるように工事してくれています。だから、僕も頑張る気持ちになります。茶色の景色も悪くないと思えます。

今、世界で起きている様々な出来事がテレビのニュースで流れます。しかし僕は、ネパール大地震の悲惨な映像を見ることが出来ません。また、中学生の死と事故が多いことが苦しくてたまりません。それはきっと、津波の恐さを体験したから、僕の心の中が苦しいからかもしれません。大好きだった祖父が建てたどっしりした母屋作りの和風の家が大好きだったからかもしれません。祖父と父の大工道具は全て津波で流されました。でも、もう一度、大工の仕事を頑張れと、全国の大工さん方が大切な道具をゆずってくれました。福井県のある建設会社の社長は、一千万円くらいする製材機をゆずってくださいました。とても勇気が出ました。この感謝の気持ちを忘れてはいけません。祖父も父も頑張っているけれど、僕が一番頑張るぞと思います。だから、早く建築家になって、木材をふんだんに使用した家を設計して大工になりたいと思います。そして、仮設住宅での暮らしを早く終わらせたいです。僕を大切に見守ってくれている近所の人達や、大切な大工道具をくれた人達、僕の夢を支えて応援してくれる人達に、平和を築いていくこと、それが中学生になった今の僕の気持ちです。そして、必ず、この場所が前のように明るい赤色や黄色の世界に戻る日がきます。僕がもう少し成長したら、今よりも知識が付いて、考え方も変わると思います。たくさんのアイディアあふれる頭になっていてほしいです。そうして、僕は建築家になります。学校から早く帰った日は、現場にヘルメットをかぶって勉強しに行きます。自分の頭の中をみがきに行きます。今はまだ足手まといかもしれないけれど、必ず恩返しをするので、職人さん、たくさん勉強させてください。一日でも早く、平和を築ける日がくると思うと、僕の頭の中は、わくわく楽しさでいっぱいです。

震災後、出会った人たち

気仙沼市立気仙沼中学校
二年　菅原　望乃

東日本大震災から、四年が経ちました。震災の日は、小高い場所にある小学校にいて、先生や友達と一緒に、すぐ学校の体育館に避難したので、津波の恐ろしさを知る事もなく、気仙沼の街がどのようになっているかも知らず、ただ、先生の指示に従って家族が迎えに来るのを待ちました。

体育館に避難する途中、お母さんの姿が見えました。お母さんの勤める病院が、小学校のすぐ近くにあったので、入院していた患者さんと一緒に小学校に避難してきたのです。お母さんは私の姿を見つけると、私の担任の先生に、

「よろしくお願いします。」

と、何度も頭を下げていました。私は、お母さんと会えたので、少し安心しました。

間もなく、お父さんが迎えにきて、自宅に戻り、家族がみんな無事だったことを確認できてほっとしました。

夜になって、お父さんが小学校に残っているお母さんのところに、毛布や服、食べ物を届けに行くと言うので、私も一緒について行きました。患者さんがいるので、体育館から一階の教室に移ったようでしたが、それでも、布団に寝ている患者さん以外の人は、さすがに寒かったようで、毛布はとても喜ばれました。

そして、自宅に帰ろうとした時、海の方向の空が真っ赤に燃え上がっているのを見て、何が起きているんだろうと、初めて恐怖を覚えました。翌日、明るくなって、気仙沼の街を見渡した時、一瞬ここはどこなんだろうとぼうぜんとしてしまいました。私の知っている街はもうありませんでした。

あれから四年が経過して、街は落ち着きを取り戻しています。何気なく過ぎていく毎日に、時々、あの恐ろしかった震災の後の街並みを忘れそうになる時があります。でも、震災がなかったら出会えなかった人たちもたくさんいます。

私はダンスを習っていたので、世界的ダンサーのワークショップに参加したこと。有名な芸能人の方々から、直接ダンスを教えてもらったこと。お兄ちゃんが中学校の文化祭でバンドを組む時に、支援してくれたプロのバンドの人たちと出会えたこと。その人たちに鬼ごっこしてもらったり、生演奏を聞かせてもらったり、ライブに招待してもらったりしたこと。お兄ちゃん達のサッカーの支援で、長野県の人たちと出会ったこと。震災で亡くなったじいちゃんを弔うため、初めてじいちゃんの故郷の山口県を訪れたこと。そこで、百歳を越えるひいばあちゃんと会ったこと。そのひいばあちゃんは、今年八月に亡くなったので、震災がなかったら会えないままだったでしょう。

その中で、一番の出会いは、市役所に支援に来ている島根県のAさんです。Aさんとは震災の年、私が小学校四年生の時、友達と、市民会館に避難していた人たちに慰問に行っていた時に出会いました。家で折った折り紙を配ったりしただけの慰問でしたが、Aさんはとてもほめて下さり、翌年、小学生の私たちあてに、手紙と図書カードを送ってくれました。お礼の手紙を出したことから、私とAさんの交流が始まりました。Aさんは、四年経った今でも、市役所へ支援に来ています。毎年来てくれる度に、島根県のお土産などを持ってきてくれます。そして、必ず、

「大きくなったね。勉強頑張っている?」

と、優しく声をかけてくれます。でも、私は勉強が苦手なので、もじもじしていると、

「結果はどうでも、頑張る事が大切だから、頑張っていればいいんだよ。」

と、慰めてくれます。Aさんは、いつも優しく、慰め方も上手です。朝、登校する時や下校する時にたまたま会った時も、明るくあいさつをしてくれます。とてもうれしい気分になります。四年たった今でも気仙沼の復興のため、遠い島根県から自家用車で来てくれるAさんには、私から、感謝状を贈りたいほどです。毎年Aさんに会えると、元気をもらえる様な気がします。そんなAさんの気持ちに応えるためにも、

「勉強、頑張っています。」

と、胸を張って言えるように毎日を過ごしていきたいと思います。そしていつか、多くの人たちからいただいた元気を、皆さんに返せるような大人になりたいと思います。

被災者だからできること

南三陸町立志津川中学校
二年　佐々木　朝陽

あの日、僕はいつもどおりの時間に起き、いつもどおりに学校に登校し、いつもどおり授業を受けていた。そして、いつもどおり家へ帰るつもりだった。しかし、僕が家族四人で暮らしていた思い出いっぱいの家へ帰ることはもう二度となかった。

二〇一一年三月十一日、当時僕は小学三年生だった。最近地震が多く、数日前にも津波注意報が発令されていた。そのこともあり地震だと気づいた瞬間クラスのみんなは先生が指示をする前に机の下に隠れた。みんな地震に慣れてしまっていたのだ。とても長い間揺れた後、先生に誘導され、校庭へ向かった。小学校は高い場所にあったため、校庭の一番端からでないと町の様子を見ることができなかった。当然、見に行くことは許されず、何が起こっているのか分からなかった。結局学校に泊まることになったが先生方はなぜ帰れないのかを教えてくれなかった。学校に泊まるのは初めてだった。さらに友達も一緒だったのでわくわく気分で、不安なんて感じず夜を明かした。もちろん学校に食べ物なんてあるわけがなく、空腹でみんな朝早く起きたのを覚えている。その後一人一人におにぎりが一個ずつ配られた。とても満腹になる量ではなかったが、今までで一番ありがたみをもって食べた気がした。しばらくして、保護者が来た人から帰っていいことになった。僕は親がなかなか来なかったので友達についていった。そして、一緒に校庭から町の様子を見た。自分の目を疑った。それはもう昨日まで過ごしていた町ではなかった。僕の住んでいた三階建てのアパートも全部津波を被ってボロボロになっていた。後ろにあった友達の家も同じだった。僕らはその様子を見て初めて泣いた。涙が枯れるまで泣いたのは初めてだった。僕の頭の中を家族は無事なのかという不安が襲った。一気にどん底に叩き落された気分だった。すると、後ろから聞き覚えのある声がした。同じアパートに住んでいた先輩のお父さんだった。そのお父さんから僕の母と弟、友達のお母さんと妹が高校に避難していることを聞き、みんなで高校へ行くことにした。本来はすぐに行けるはずの高校への道は厳しい道のりだった。しかし、少しも苦だとは思わなかった。途中僕の父とも合流し、無事に高校に着き一安心した。その後先輩のお母さんの実家に非難させてもらい、約一週間後くらいに秋田県の母の実家に連絡でき、その日の内に叔父がむかえに来てくれた。しかし、ここまで避難生活を共にしてきた友達との別れが辛かった。自分だけ逃げるようで申し訳なく思った。

父は南三陸町に残ったため、秋田で新しく家族三人の生活が始まった。僕は、大曲小学校に転校した。知らない人だらけの学校へ転校するのは不安だったが、震災を経験した僕がこの経験をみんなに伝えなくてはならないと心に決めて学校へ行った。話をするとみんな心配そうに声をかけてくれた。大曲小学校のみんなはとても優しく、すぐに友達になった。その一方で勉強の遅れも実感し、被災したからっていつまでも甘えてなんかいられないと思うようになった。そして、自分なりにいろんなことに挑戦していった。そんなとき、僕の思いをさらに強くしてくれる人がいた。小学五、六年生の時の担任の先生だ。その先生は様々なことに挑戦したいという僕の思いを知り、色々なことに挑戦できる機会をくれた。そのおかげで僕はたくさんのことを学んだ。その中で僕はクロスカントリーに出会った。冬の短い期間だけだったが、一生懸命取り組んだ。六年生最後の冬、一人の新聞記者さんと出会った。話を聞くと被災した子供が頑張っている姿を記事にしたいとのことだった。その記事でより多くの人に震災のことを伝えられるのならと思い取材を受けた。後日新聞に記事が載った。大曲小学校に八十一才男性とだけ記された僕宛の葉書が届いた。そこには新聞を読んで感激したことと、今後の僕へのエールの言葉が綴られていた。それを読んで涙が出た。他にも沢山の人からエールの言葉をもらいたくさん元気をもらった。大曲での生活でいろんな人と出会い大きく成長できた。今の僕があるのはその人たちのおかげだ。

今回の震災そして、秋田での経験で自分のするべきことがはっきりした。まず将来の夢だ。僕は海上保安官になりたい。災害が起きたら、困っている人を助けることが、今回の経験でお世話になった全ての方々への恩返しだと思っている。また、復興は被災した人の心の傷や、思いを一番理解できる同じ被災者が先になって進めなくてはいけないと思う。いつまでも助けられてばかりはいられないと思う。同じ経験をした者だからこそ南三陸町を、宮城県を、被災地を震災前の何倍もいい町にできる。新しい町を作っていくことは僕ら被災者だからこそできることなんだと思う。